

みちしるべ

境内にある親鸞聖人の銅像を仰ぎ見る度、宗祖は人生五十年と言われておられた時代に、私の年令の時には、真実信心のお念仏を得させるために書物を書き続けられておられたのだと思いをはせるのである。

私は令和七年には喜寿を迎えるが、大勢の中での会話が聞き取り難くなり、息切れがし、名前や言葉が出難く、物忘れが多い。また筋力が落ち、眼鏡が欠かせない。歩くのが遅くなる等を自覚するようになってきている。

親鸞聖人は沢山の書物を書き、お同行からのお手紙にもご返事を出されている。親鸞聖人が喜寿の時には、私のようなことは無かったのだろうか？頭を使い文字を書いておられるのでその様なことは無かったのかもしれない。八十五才の時には「目も見えず候、何事もみな忘れ候…」とお手紙に書かれておられるが、それまでは精力的に書物を書かれていたと思うと深く頭が垂れ、お陰でお念仏を称えられていることを有難く思え、心から尊崇の念が生じるのである。

聖人の教えは、繰り返し返しの利かない私の人生の「道標」なのである。

